《入選》

私の考え

彦根総合高等学校 一年

田中 美凧 さん

私の母は聴覚障害者だ。けれど、私はそのことをあまり深く考えていない。もちろん知らない人との会話の時は手助けをするし、母も会話に入ることができるよう手話を日常的に使っている。けれど、それが生まれた時からのことだったから気にならないう。私はそれが当たり前だから。

でも時々、心無い言葉を言ってくる人がいる。「耳が聴こえない人なんて社会でやっていけないでしょう」「君（私）もかわいそうだね。こんなお母さんを持って」「みたいに。ただ単に私たち家族を

心配してくれている人の声色と、心配をしているふりをしなくてはならない人の声色は全く違う。今でこそ心無い言葉を言う人の数は少なくなってきたが、完全になくなったわけではない。母は、耳が聴こえないこと以外は本当に健常者たちと同じ人間なのだから、そういう人に遭遇するたび、私はいつもいやな気持ちと悲しい気持ちともやもやした気持ちになっ

てしまう。私は耳の聴こえない母を家族に持っているからだろうが、街中にある障害者用の配慮やバリアフリーなどのものを無意識に見てしまうことが多い。なんと表すべきかわからないが、滋賀県全般、特に私の住んでいる町守山市には障害者用の配慮（たとえば筆談用の紙がいたるところのお店においてあったり、四回ほど通った店には手

話ができる店員さんがいるようになったりなどのこと）が数多くあると思う。（私の視野が狭いだけなのかもしれないが、）母も同じく聴覚障害者である母の友人も時々配慮に助けられているようだ。物での配慮のほかに、人がもつと普通の反応をしてもらえるようになればなと思う。

私は今まで生きてきて思ったことがある。それは「区別と差別は違うものである」ということだ。「こう聞くと当たり前だと思っても無理はないが、この違いに気づいていない人が実は大勢いる」ということを知っているだろうか。たとえば、筆談をしているのを「差別」と言ったり、障害者をけなすような発言をするのを「必要な区別」と言ったり。区別というのは、ある程度世の中になくてはならないものだと思う。健常

者にだけ合わせていたら障害者が多少しんどい想いになるし、障害者にだけ合わせていたら健常者が多少しんどくなると思うからである。だから筆談や手話をするのは区別なのだ。

区別と差別の違いを理解して、健常者も障害者も心地よく生活できる社会になれば、たらないなと私は思っている。